

【資料】

3歳未満児保育における安全配慮の構造

—SCAT分析を用いた保育者の語りからの考察—

The Structure of Safety Considerations in Childcare for Children Under Three Years Old:

A Study of Childcare Teachers' Narratives Using SCAT Analysis

野中 奏 Kanade NONAKA

(大阪総合保育大学大学院)

論文要旨

本研究は、3歳未満児保育における年齢別の安全配慮の特徴とその構造を明らかにすることを目的とした。0・1・2歳児クラスを担当する保育者計9名(経験年数3-36年)に対して半構造化インタビューを実施し、SCAT分析を用いて検討した結果、109件の理論記述が得られ、13のカテゴリーに分類された。年齢別の特徴として、0歳児クラスでは生命の安全に直結する基本的配慮と発達段階に応じた細やかな環境構成、1歳児クラスでは活動範囲の拡大に伴う見守りと探索行動の保障、2歳児クラスでは子ども自身が安全な行動を選択できるような教育的関わりが重視されていた。また、年齢が上がるにつれて、保育者の安全配慮は見守りと危険からの保護から、子どもの主体的な活動を保障するための配慮や教育的な働きかけへと重点が移行していく傾向が見られた。全クラスに共通する特徴として、環境設定の工夫、職員間の連携と情報共有、保護者との連携、指導計画への安全配慮の記載の重要性が挙げられた。さらに、保育者の経験年数による視点の違いも明らかとなり、経験年数の長い保育者は時代の変化への対応、中堅保育者は具体的な安全教育の方法、若手保育者は職員間の連携強化についてそれぞれ特徴的な視点を持っていた。これらの結果は、3歳未満児保育における発達段階に応じた安全配慮の在り方や保育者の専門性の向上に重要な示唆を提供するものである。今後は、3歳以上児も含めた調査や、より大規模かつ多様なサンプルでの検証が必要である。

キーワード：3歳未満児保育 (Childcare for children under 3)、0・1・2歳児保育 (childcare for ages 0-2)、安全配慮 (Safety Considerations)、SCAT分析(SCAT Analysis)、危機管理(Crisis management)

1. 緒言

保育所保育指針第3章健康及び安全では、「子どもの健康及び安全の確保は、子どもの生命の保持と健やかな生活の基本であり、一人一人の子どもの健康の保持及び増進並びに安全の確保とともに、保育所全体における健康及び安全の確保に努めることが重要となる。」と記載されている。しかし、保育中の事故は後を絶たず、保育施設において子どもの安全が確保されているとは言い難い。保育施設等では、子どもの健康と安全の確保のため、保育中に発生したヒヤリハットの収集や、危機管理マニュアルの整備等が行われているが、保育形態の違いや地域差、保育者間での認識の差異によって一律には定められていないのが現状である。

先行研究においても、0・1・2歳児保育における安全配慮の重要性が指摘されている。七木田(2021)は、乳児保育に

における「緩やかな担当制」の導入と個別の指導計画の作成がヒヤリハットの減少につながる可能性を示唆している。この研究では、緩やかな担当制を実施している園の約5割でヒヤリハットが減少したと報告されており、特定の保育者が子どもと密接な関わりを持つことの重要性が示されている。一方、葛野・加藤(2020)は、0・1・2歳児クラスでのヒヤリハット事例を分析し、年齢や発達段階によって事故の特徴が異なることを明らかにし、特に、0歳児では誤飲・窒息のリスクが高く、1・2歳児では転倒や衝突のリスクが増加すると述べている。これらの結果は、子どもの年齢や発達に応じた適切な安全配慮の必要性を示唆している。しかしながら、0・1・2歳児の各年齢における具体的な安全配慮の実態や、年齢による安全配慮の違いについては十分に検討されていない。0・1・2歳児は特に月齢による発達の差が大きいので、より詳

細な年齢別の安全配慮の実態を明らかにすることが求められる。

そこで本研究は、特に安全上の配慮が必要な0・1・2歳児を担当する保育者の安全配慮や危機管理に関する取り組みを明らかにし、各年齢における安全配慮の特徴と課題を検討することを目的とする。保育所保育指針第3章「健康及び安全」に記載されている、特に重大事故が発生しやすい場面において配慮している点を中心に保育者の安全配慮を整理し、保育者の語りをもとに考察する。さらに、年齢による安全配慮の違いや変化を分析することで、3歳未満児保育における危機管理の在り方について示唆を得ることを目指す。

2. 研究方法

(1) インタビュー調査の対象と調査期間

本研究の対象は、便宜的抽出を行い選定し研究協力を得た大阪府下の私立認定こども園3園(学校法人2園、社会福祉法人1園)の、0・1・2歳児クラスの各担任保育者1名ずつの計9名である。なお、3園はそれぞれ異なる法人が運営する独立した園であり、系列関係にはないが、いずれも担当制による保育を実施している園である。対象者の選定は、経験年数の異なる保育者を含めることで、多様な視点を得られるよう配慮した。研究協力者のプロフィールを表1に示す。調査は2023年5月15日から7月6日の間の7日間で、一人あたり約30分で行った。半構造化インタビューを採用した理由は、事前に設定した質問項目を基本としつつ、対象者の回答に応じて柔軟に質問を追加・変更することで、より深い洞察を得られると考えたためである。

表1：インタビュー協力者のプロフィール

保育者	所属	保育経験年数	担当クラス
A 保育者	X 園	9 年目	0 歳児
B 保育者	X 園	3 年目	1 歳児
C 保育者	X 園	36 年目	2 歳児
D 保育者	Y 園	5 年目	0 歳児
E 保育者	Y 園	7 年目	1 歳児
F 保育者	Y 園	19 年目	2 歳児
G 保育者	Z 園	6 年目	0 歳児
H 保育者	Z 園	11 年目	1 歳児
I 保育者	Z 園	7 年目	2 歳児

(2) 質問項目

質問項目は次の12項目である。

- ①経験年数と担当しているクラスの年齢について
- ②保育中にこどもの行動でヒヤリとしたこと(ヒヤリハット)について
- ③②があった時に、どのような対応を行ったか
- ④活動内容を考えるうえで、安全を確保するために配慮していることはあるか
- ⑤水遊び中に配慮していることはあるか
- ⑥睡眠中(午睡時間)に配慮していることはあるか
- ⑦食事中に配慮していることはあるか
- ⑧戸外散歩中に配慮していることはあるか
- ⑨保育室の環境設定について配慮していることはあるか
- ⑩④から⑨にあげられた内容は指導計画に記載しているか。また、どのような記述か
- ⑪保育者はどのようにこどもの安全にかかわる情報の共有を行っているか
- ⑫保育中の事故を防ぐために今後の課題と感じていることはあるか

これらの質問項目は、保育所保育指針第3章「健康及び安全」に記載されている重大事故が発生しやすい場面を中心に、日常的な保育活動全般における安全配慮の実態を把握できるよう設定した。また、年齢別の特徴や違いを明らかにするため、各クラスに共通する質問と、年齢特有の配慮に関する質問を組み合わせた。

(3) 分析方法

インタビューの分析は、質的研究の分析手法である SCAT (Steps for Coding and Theorization) による分析をもとにして結果の整理を行った。SCAT は、質的データを4つのステップでコーディングし、そこから得られた構成概念をもとにストーリーラインを記述する分析手法である。この手法は、明示的で段階的な分析手続きを有すること、比較的小規模のデータに適用可能であること、分析の過程が可視化されるため質的データの客観性を高めることができることから(大谷, 2007)、今回の分析手法として採用した。本研究では SCAT の手法を参考に、テキストの意味内容の要約からより抽象度の高い構成概念を生成し、それらを分類・整理することで理論的記述を導き出した。さらに、年齢別の特徴を明確にするため、SCAT 分析で得られた理論記述を0・1・2歳児クラスごとに再分類を行った。

(4) 倫理的配慮

倫理的配慮として、インタビュー調査の実施前に園長と各研究協力者に研究目的とインタビューの内容、倫理的配慮について説明文書に沿って説明し同意書による承諾を得た。インタビューは、研究協力者の同意を得て、IC レコーダーに

録音し、直接起こした逐語録から、個人や園を特定されるような記述は削除や符号に置き換え、分析用のテキストデータを作成した。なお本研究の実施は、大阪総合保育大学の研究倫理委員会の承認を得て行った(承認番号-児保研-084)。

3. 研究結果

インタビューの総録音時間は約 235 分であった。SCAT の手法を用いてインタビューデータを分析した結果、109 件の理論記述が得られた。さらに、理論記述を整理すると、【ヒヤリハットや事故の発生要因】、【事故予防と安全対策】、【保育者連携】、【家庭連携】、【こどもの挑戦と安全のバランス】、【保育者の意識の変容】、【水遊び中の留意点】、【睡眠中の留意点】、【食事中の留意点】、【戸外での留意点】、【保育室の環境設定の留意点】、【指導計画に安全配慮を記載する意義】、【課題】の 13 カテゴリーに分類された。この分類は、妥当性を確保するため保育者 7 名で 100% の一致が見られるまで協議と再評価を行った。理論記述とカテゴリーの一覧は表 2 (論文末尾に掲載) のとおりである。

以下、SCAT により導きだされた概念には下線を付して記述し、対応する番号を示しながら保育者の安全配慮についてクラス別に考察する。

(1) 0 歳児クラスにおける安全配慮の特徴

0 歳児クラス担当の保育者(A: 9 年目、D: 5 年目、G: 6 年目)のインタビュー分析から、合計 65 件の理論記述が抽出された。そのうち 3 名全員が言及したものは 8 件、2 名が言及したものは 19 件、1 名のみが言及したものは 38 件であった。全員が言及した 8 件の理論記述は、【少数で活動する】【定期的な呼吸チェックを行う】【うつ伏せや横向きは仰向けにする】【こどもの所在確認を保育者が連携して行う】【具体的な見守りの仕方や言葉掛け、援助を検討することができる】【こどものそばでの見守りや援助を行う】【水深や水温に注意する】【重大事故にならない環境をつくること】であり、生命の安全に直結する基本的な配慮が中心となっていた。

①ヒヤリハットや事故の発生要因と対応

0 歳児特有の発達段階を反映し、這い這いやつかまり立ちなど、運動機能の急速な発達に伴う事故の可能性が指摘された。A 保育者は「段差を踏み外す、泥水を飲む、花瓶の水を飲むとか」と述べ、危険な環境が事故を引き起こす(a1)要因を指摘している。また、D 保育者は「楽しんでい中で予想ができないこどもの行動にヒヤリとします」と述べ、遊びの中で起こる(a2)事故の予測の難しさを指摘している。これらへの対応として、環境の見直し・改善を行い、こどもの安全

を確保する(b2)こと、保育者が仲立ちとなる(b8)など、環境面と人的面での対策が講じられていた。

②活動別の安全配慮

水遊び中の配慮として、誤飲や溺水のリスクを考慮し、水深や水温に注意する(g2)ことが全保育者から言及された。G 保育者は「いっぱい水を入れたら危ないんでちょっと浅めの水の量も考えて入れたり」と述べ、発達段階に応じた水量の調整を行っていた。また、D 保育者は「水から上がった際にはエアコンを消してこどもの体温調節ができるようにしたり」と、体調管理への配慮についても言及している。さらに、水遊び中は誤飲や窒息・転倒リスクの軽減を図った環境設定を行う(g4)についても複数の保育者が言及しており、特に安全面での配慮が重視されていた。睡眠中の配慮として、乳幼児突然死症候群(SIDS)への警戒から、全員が定期的な呼吸チェックを行う(h1)ことを重視していた。D 保育者は「0 歳児は呼吸チェックを必ずしないといけないので、呼吸をしているか体や胸に触れて確かめたり」と、具体的な確認方法を説明している。また、うつ伏せや横向きは仰向けにする(h2)など、睡眠時の体位にも注意していた。G 保育者は布団の位置は見渡せるような配置にする(h4)と述べ、保育者が常にこどもの様子を確認できる環境設定の重要性を指摘している。食事中の配慮として、誤嚥や窒息のリスクが高い時期であることから、食事は少数で丁寧にかかわる(i7)、一人一人の成長に合わせてすすめる(i8)という個別的な対応が重視された。D 保育者は「今年から食事中は 0 歳児は 1 対 1 での介助を始めました。しっかりと咀嚼や飲み込みができていないか確認してから次の食事に進むようにして」と述べ、個別的な関わり的重要性を強調している。また、G 保育者は無理やり食べさせない(i5)ことを挙げ、こどものペースを尊重した援助の必要性を指摘している。

③環境設定と玩具の選択

急速な発達に対応するため、月齢や発達に応じて玩具の入れ替えを行う(k6)ことが特に重視されていた。D 保育者は、「年齢や発達に合わせて玩具の好みも変わってくるので、こどもの姿に合わせてながら、発達に合った玩具を 2、3 ヶ月に 1 回位変えて」と述べ、発達に応じた環境構成の重要性を指摘している。また、A 保育者は「階段や窓の近くに高い台は置かない」(k4)と具体的な配置の工夫について言及している。

④職員間の連携と情報共有

全ての保育者が保育者間の情報共有と連携が重要である(c1)を重視していた。G 保育者は具体的な事例として「まず止血をして、主任の先生と、あと、看護師さんの方に...」と述べ、緊急時の連携体制の重要性を強調している。また、事故防止策の検討は複数の保育者で行う(c2)、安全を確保するための保育者の動きと立ち位置が重要である(c3)など、具体的な連携方法についても言及がみられた。D 保育者は「週に

1回から2回位担任でミーティングを行っているので、その時に内容を密に話し合って改善するようにしています」と述べ、定期的な話し合いの場を設けることの重要性を指摘している。

⑤保護者との連携

2名の保育者が言及した園の保育に対する保護者の理解を得る(d1)、1名の保育者が言及したこどもの怪我を軽視しない(d2)が挙げられた。G保育者は「降園の時に保護者にこういうことがありましてって言って、注意不足で、ちょっと謝罪をしながら、また、おうちでもこの様子を見てくださって言って」と述べ、保護者への丁寧な説明と謝罪の重要性を指摘している。また、D保育者は「保護者の方にもミーティングの日はノートを書かずに降園時に様子を伝えるなどして、保護者の方からも理解を得ています」と、日常的なコミュニケーションの工夫について言及している。

⑥指導計画への反映

複数の保育者から言及された具体的な見守りの仕方や言葉掛け、援助を検討することができる(l1)、ねらいを明確にすることにつながる(l4)、こどもの姿の記録でもあるため、育ちの見直しを持つことができる(l7)が挙げられた。D保育者は「こども一人ひとりの成長の段階を理解することをもちろんできるし、その次のこどもの目標、次の成長に向けてそのできるようになってほしいことやどんなことを楽しんでくれるかなとかそういったことを考えながらねらいを決める」と述べ、指導計画への記載がこども理解と保育の展開につながることを指摘している。

0歳児クラスにおける安全配慮の考察

0歳児クラスでは、生命の安全に直結する配慮が最優先され、特にSIDSや誤嚥などの重大事故のリスクへの対策が徹底されていた。また、這い這いやつかまり立ちなど、運動機能の急速な発達に伴う事故の予防にも重点が置かれ、きめ細かな個別対応と頻繁な環境の見直しが特徴的であった。さらに、理論記述のパターンを見ると、1名のみ言及が38件となっており、保育者による個別的な配慮の多様性が示された。これは0歳児の発達の個人差の大きさを反映していると考えられる。一方で、3名全員が言及した理論記述は生命の安全に関わる基本的な配慮に集中しており、0歳児保育における安全配慮の核となる部分が明確になった。また、2名が言及した19件の理論記述には、環境設定や保護者との連携に関する具体的な方法が多く含まれており、実践知の共有がなされている部分が示唆された。

(2) 1歳児クラスにおける安全配慮の特徴

1歳児クラス担当の保育者(B:3年目、E:7年目、H:11年目)のインタビュー分析から、合計64件の理論記述が抽出された。そのうち3名全員が言及したものは11件、2名が

言及したものは20件、1名のみが言及したものは43件であった。全員が言及した11件の理論記述は、【ヒヤリハット報告を行い情報共有と要因分析を行う】【保育者間の情報共有と連携が重要である】【安全を確保するための保育者の動きと立ち位置が重要である】【水遊び中は監視の徹底を行う】【保育者の役割分担を明確にする】【定期的な呼吸チェックを行う】【うつ伏せや横向きは仰向けにする】【寝具の状態を確認をする】【食事中は必要に応じた援助や言葉かけを行う】【こどもの所在確認を保育者が連携して行う】【死角を作らず見通しの良い環境にする】であり、活動範囲の拡大に伴う見守りと環境設定に関する配慮が中心となっていた。

①ヒヤリハットや事故の発生要因と対応

1歳児クラスのヒヤリハットの主な発生要因として、こどもの見守り不足で起こる(a4)と危険な環境が事故を引き起こす(a1)が特徴的であった。B保育者は「こどもの見守りが不足に保育室から出ていくとか、階段の1番上にこどもが1人でいて誰も気づいていなかった」と述べ、探索行動の活発化に伴う事故の可能性を指摘している。これらへの対応として、環境の見直し・改善を行い、こどもの安全を確保する(b2)ことに加え、事前にこどもの姿を具体的にイメージする(b4)、こどもの発達に沿っているのかを意識する(b5)といった予防的な取り組みが重視されていた。

②活動別の安全配慮

水遊び中の配慮として、水遊び中は監視の徹底を行う(g1)、保育者の役割分担を明確にする(g3)ことが重視された。H保育者は「基本的に監視員も安全係っていう形で、こどもと遊ばない、何もしないでプール全体を見てる人っていうのを必ず1人」と述べ、役割分担の明確化による安全確保の方法を具体的に説明している。また、複数の保育者から水深や水温に注意する(g2)、プールの配置は保育者が見えるところにする(g5)、こどもの体調が優れないときは参加を控える(g6)について言及があり、より多面的な配慮の必要性が示された。睡眠中の配慮として、うつ伏せや横向きは仰向けにする(h2)という基本的な配慮に加え、寝具の状態を確認する(h3)など、自分で動くこどもへの対応が加わっていた。B保育者は「寝る前に寝る場所の片付けを行うことや、スタイを外したり服の状態を確認したり」と述べ、こどもの動きを予測した環境整備の重要性を指摘している。H保育者は「コットっていうのを使ってるんですけど、うつ伏せでも呼吸ができるはできるんですけど、やっぱり顔の向きがお腹が下になっていないと寝れない。お子さんもいるので」と、個々のこどもの状態に応じた配慮について語っている。また、布団の位置は見渡せるような配置にする(h4)、周囲の片付けを行う(h5)など、環境面での配慮も複数の保育者から言及された。食事中の配慮は、自分で食べようとする姿への対応として、食事中は必要に応じた援助や言葉かけを行う(i1)、食材の大きさが適切

か確認を行う(i2)ことが重視された。また口に入れたまま席を立たないように(i3)など、こどもの行動への対応も見られた。

③環境設定と玩具の選択

探索行動の活発化に対応し、死角を作らず見通しの良い環境にする(k1)、リスクの軽減を図った環境にする(k2)、こどもが走らない環境作り(k3)が重視された。H保育者は「なるべく死角を作らないようにする。だだっ広くてもやっぱ走り回ってしまうので、低めの柵とかパーテーションを使って」と述べ、活動的なこどもの動線を考慮した環境構成を説明している。また、E保育者は災害時のことも想定し、災害時にも安全な環境にする(k9)と述べ、より広い視点での安全確保についても言及していた。

④職員間の連携と情報共有

活動範囲の広がりに対応するため、事故防止策の検討は複数の保育者で行う(c2)、安全を確保するための保育者の動きと立ち位置が重要である(c3)といった、より具体的な連携方法が重視されていた。E保育者は「朝保育者だったり事であったり、共有している形になると思います但し他の園のことで何かあったときの情報に関しては個人差があるなと思っています」と述べ、情報共有における課題についても言及している。また、保育者間の相互理解が重要である(c4)、よりの確に伝えることでイメージを共有する(c5)など、より質の高い連携のあり方についても言及がみられた。

⑤保護者との連携

危険も予測されるこどもの行動の出現に関連して、日ごろからこどもの姿をこまめに伝える(d4)ことが重視されていた。

⑥指導計画への反映

複数の保育者から具体的な見守りの仕方や言葉掛け、援助を検討することができる(l1)、保育者間での共通認識や安全性の確保につながる(l2)、意識しているだけでは周りの保育者に伝わらない(l6)について言及があった。E保育者は「保育者自身で思ってるだけだと複数担任なので周りに伝わらないかなと思うので」と述べ、指導計画への記載の重要性を指摘している。

1歳児クラスにおける考察

1歳児クラスでは、歩行の確立による活動範囲の拡大と、自我の芽生えに伴う探索行動の活発化という発達の特徴を反映した安全配慮が特徴的であった。全員が言及した11件の理論記述には、職員間の連携や環境構成に関する項目が多く含まれており、組織的な安全管理の重要性が示された。理論記述の出現パターンを見ると、1名のみ言及が43件と最も多く、これは各保育者が担当するこどもの発達状況や園の特性に応じた多様な配慮を行っていることを示している。2名が言及した20件の理論記述には、具体的な環境設定の

方法や保育者の動きに関する内容が多く含まれており、実践知として共有されている部分が示された。また、経験年数による違いも見られ、11年目のH保育者からはこどもの挑戦を促しながら安全対策をとる(e3)、段差等を用いて身体作りを行う(e8)など、発達を促す視点からの言及が特徴的であった。

(3)2歳児クラスにおける安全配慮

2歳児クラス担当の保育者(C:36年目、F:19年目、I:7年目)のインタビュー分析から、合計56件の理論記述が抽出された。そのうち3名全員が言及したものは6件、2名が言及したものは14件、1名のみが言及したものは46件であった。全員が言及した6件の理論記述は、【ヒヤリハット報告を行い情報共有と要因分析を行う】【水遊び中は監視の徹底を行う】【定期的な呼吸チェックを行う】【食事中は必要に応じた援助や言葉かけを行う】【保育者間の連携を強化すること】【こどもへの安全教育的な言葉掛けを行う】であり、こども自身が安全な行動を選択できるような働きかけを重視する傾向が見られた。

①ヒヤリハットや事故の発生要因と対応

2歳児クラスでは、生活の流れの中で起こる(a6)ことが挙げられた。C保育者は「今手を洗うのに階段みたいなところに高い流しで手を洗っているので毎日やっていることなので手を洗い終わった後にふと後ろを向いた時に乗っている子が足を踏み外して」と述べ、日常的な場面での事故の可能性を指摘している。またI保育者は通常と異なる状況で事故は発生する(a5)と述べ、特に行事や普段と異なる活動での配慮の必要性を指摘している。これらへの対応として、環境の見直し・改善を行い、こどもの安全を確保する(b2)に加え、こどもへの安全教育的な言葉掛けを行う(e4)など、こども自身の気付きを促す関わりが重視されていた。

②活動別の安全配慮

水遊び中の配慮として、水遊び中は監視の徹底を行う(g1)ことを継続しながら、F保育者は「こどもなりにわかるような仕草とかなりきって、ここは廊下だよ、走らないよとか、水遊びに行く時に床が滑るので、走ると滑って転ぶかもしれないね」と述べ、こどもへの具体的な説明を通じた安全教育を実践することを重視していた。睡眠中の配慮として、定期的な呼吸チェック(h1)は継続しながら、I保育者は「こども同士が結構こう保育室が狭いってこともあって寝てる感覚がすごい近いんですよ」と述べ、集団が大きくなったことでの午睡における新たな配慮の必要性を指摘している。また、寝具の状態を確認する(h3)、室温を調整する(h6)など、快適な睡眠環境の確保についても複数の保育者から言及があった。全員が食事中は必要に応じた援助や言葉かけを行う(i1)を重視し、I保育者は「今特に意識してるのが姿勢です」と

述べ、基本的な生活習慣の確立に向けた視点を示している。また、食事は提供前に適切な大きさや形状を確認を行う(i2)、食事の前後に水分補給を促す(i9)など、事故予防と生活習慣の形成を両立させた配慮がみられた。

③環境設定と玩具の選択

こどもが走らない環境作り(k3)において、物理的な環境構成に加え、I保育者は「保育室を走ったりとかジャンプする子がいるんですよ。だからこう座って集中できるようなコーナーの設置は特に心がけて」と述べ、こども自身が安全な行動を選択できる環境構成を重視していた。

④職員間の連携と情報共有

保育者間の情報共有と連携が重要である(c1)に加え、事故防止策の検討は複数の保育者で行う(c2)、保育者間の相互理解が重要である(c4)など、より組織的な連携体制が重視されていた。C保育者は「全員が同じスタンスでなくても良いと思っていますので、私は私の責任で見守っているの、ここまで挑戦させてあげようというのがそれぞれにあっていい」と、こどもの育ちを支える職員間の対話の重要性を指摘している。幼児期への移行を見据えることの重要性も示唆された。

⑤保護者との連携

園の保育に対する保護者の理解を得る(d1)ことが特に重視され、C保育者は「保護者への伝え方も難しく、丁寧に伝えないといけないと感じました」と、保育の意図を丁寧に伝えることの重要性を指摘している。また、日ごろからこどもの姿をこまめに伝える(d4)など、日常的なコミュニケーションの重要性についても言及がみられた。

⑥指導計画への反映

ねらいを明確にすることにつながる(l4)、意識の維持と継続ができる(l3)が重視され、I保育者は「記載することによってねらいを立てやすいと思いますね」と述べ、指導計画への記載が保育の質向上につながることを指摘している。また、意識しているだけでは周りの保育者に伝わらない(l6)という視点も示された。

2歳児クラスにおける考察

2歳児クラスでは、基本的な生活習慣の確立と幼児期への移行を見据えた安全教育的な関わりが特徴的であった。全員が言及した6件の理論記述には、こどもへの安全教育的な働きかけが含まれており、こども自身が安全な行動を選択できる力の育成が重視されていることが示された。

理論記述の出現パターンを見ると、1名のみと言及が46件と最も多く、これは保育者の経験年数による視点の違いが顕著に表れていると考えられる。特に36年のキャリアを持つC保育者からは、時代の変化への適応と積極的な取り組み(m15)など、より長期的な視点からの言及が見られた。また、2名が言及した14件の理論記述には、具体的な安全教育の方法や保護者との連携に関する内容が多く含まれてお

り、2歳児期の発達の特徴を踏まえた実践知として共有されていることが示唆された。

4. カテゴリー別の特徴

インタビュー分析の結果、各年齢クラスで抽出された理論記述は0歳児65件、1歳児64件、2歳児56件と推移し、その内容と出現パターンには年齢による特徴的な変化が見られた。以下、カテゴリー別の特徴と年齢間の関連性について述べる。

①カテゴリー別の特徴

ヒヤリハットの発生要因は、0歳児では【遊びの中で起こる】【危険な環境が事故を引き起こす】が主であったのに対し、1歳児では【こどもの見守り不足で起こる】が加わり、2歳児では【生活の流れの中で起こる】が特徴的となった。事故予防と安全対策については、0歳児の【環境の見直し・改善】から、1歳児の【事前にこどもの姿を具体的にイメージする】を経て、2歳児では【こどもへの安全教育的な言葉掛け】へと、より予防的・教育的な関わりへと変化していた。

活動場面での配慮は、水遊びでは全年齢で【監視の徹底】が重視される一方、2歳児ではこどもへの説明を通じた安全教育的な関わりが加わっていた。睡眠場面では、0歳児での生命の安全に直結する配慮が、1歳児、2歳児と年齢が上がるにつれて、集団での午睡環境の整備へと重点が移行していた。食事場面でも同様に、0歳児での誤嚥防止を中心とした配慮から、2歳児では基本的な生活習慣の確立を意識した配慮へと変化していた。

職員間の連携については、0歳児での緊急時対応を中心とした連携から、1歳児での役割分担の明確化を経て、2歳児ではより組織的な連携体制の構築へと発展していた。保護者との連携も、0歳児での怪我の報告や説明を中心とした関わりから、2歳児では保育の意図を伝える段階へと変化していた。

カテゴリー別の考察

3歳未満児の安全配慮は「見守りと保護から安全教育へ」という方向性を持ちながら、各年齢の発達の特徴に応じた重層的な構造を形成していることが示された。また、全年齢を通じて共通する基盤的要素が存在する一方で、年齢に応じた特徴的な配慮も見出された。特に注目すべきは、2歳児クラスで見られた安全教育的な関わりが、それまでの年齢での配慮を土台としながら、より主体的な安全行動の獲得を目指す段階へと発展していく様子である。このように3歳未満児の安全配慮は、発達段階に応じた重層的な構造を持ちながら、幼児期への接続を見据えた連続的な発展過程として捉えることができる。

5. 総合考察

本研究では、0・1・2歳児クラスにおける安全配慮の特徴とその構造を明らかにした。得られた知見から、以下の3つの観点から考察を行う。

第一に、3歳未満児の安全配慮における重層的構造の意義について考察する。理論記述の出現パターンの分析から、各年齢に共通する基盤的要素と年齢特有の配慮事項が明らかになった。特に全員が言及した理論記述数は1歳児が11件と最も多く、0歳児8件、2歳児6件と推移していた。これは、1歳児期の活動範囲の拡大期において、特に共通認識として重要視される配慮事項が多いことを示している。一方で、1名のみ言及数は2歳児で46件と最も多く、0歳児38件、1歳児43件と年齢が上がるにつれて増加していた。この結果は、年齢が上がるにつれて配慮すべき事項が多様化・個別化していく傾向を示すとともに、保育者の経験に基づく個別の実践知が蓄積されていることを示唆している。

第二に、安全配慮とこどもの主体的な活動の関係性について考察する。0歳児での生命の安全を重視した保護的な関わりから、1歳児での探索活動の保障、2歳児での安全教育的な関わりへと変化する過程は、こどもの主体性の育ちと安全配慮が相互に支え合う関係にあることを示している。特に注目すべきは、2歳児クラスにおいて全員が言及した理論記述に【こどもへの安全教育的な言葉掛けを行う】が含まれていたことである。これは、それまでの年齢での配慮を土台としながら、より主体的な安全行動の獲得を目指す段階へと発展していることを示している。

第三に、保育者の専門性の発揮という観点から考察する。保育者の経験年数による特徴的な違いが見られ、36年のキャリアを持つC保育者からは【時代の変化への適応と積極的な取り組み】など、より長期的な視点からの言及が見られた。一方、経験年数が比較的短い保育者からは職員間の連携や情報共有の重要性についての言及が多く見られた。このような経験年数による視点の違いは、互いに補完し合いながら、園全体としての安全管理の質を高めていることが示唆された。また、2名の保育者が共通して言及した理論記述には、具体的な環境設定の方法や保育者の動きに関する内容が多く含まれており、実践知として共有されている部分が明らかになった。

以上から、3歳未満児の安全配慮は、発達の連続性、主体性の育ち、保育者の専門性という3つの要素が相互に関連しながら展開されていることが示された。また、保育者の経験年数による違いも見られた。経験年数の長い保育者(20年以上)は時代の変化に応じた安全配慮の変化について、中堅保育者(10-19年)は具体的な安全教育の方法について、若手保育者(10年未満)は職員間の連携強化の重要性について、それぞれ特徴的な視点を持っていた。保育者の経験年数

による視点の違いや、年齢による配慮事項の多様化は、より豊かな保育実践を生み出す可能性を持つことが示唆された。

本研究の限界として、以下の点が挙げられる。第一に、サンプルサイズの制約である。各年齢3名ずつ計9名の保育者を対象としており、より多様な視点を得るためには、より多くの保育者からのデータ収集が必要である。第二に、地域的偏りがある。大阪府下の認定こども園3園に限定されており、結果の一般化には注意が必要である。第三に、0~2歳児クラスに限定した調査である点が挙げられる。3歳以上児への接続を見据えた安全教育の在り方を検討するためには、幼児期を含めた調査が必要である。

今後の展望として、各園の保育形態や特徴による違いを検討する必要がある。本研究では担当制による保育を行う園を対象としたが、異なる保育形態における安全配慮の特徴を明らかにすることで、より実践的な示唆が得られると考えられる。また、園の物理的環境や安全管理に関する方針、マニュアルの有無による違いについても検討する必要がある。これらの要因が安全配慮の実践にどのような影響を与えているのかを明らかにすることは、より効果的な安全管理体制の構築につながるであろう。

さらに、本研究で明らかになった保育者の経験年数による安全意識の違いについて、より詳細な分析が求められる。特に、ベテラン保育者の持つ実践知がどのように形成され、若手保育者に伝承されていくのかというプロセスの解明は、保育の質向上において重要な課題となる。また、3歳以上児クラスを含めた縦断的な調査を実施することで、乳児期から幼児期への安全教育の連続性についてより深い知見が得られると考えられる。

このような課題に取り組むにあたっては、質的データと量的データを組み合わせた混合研究法的アプローチも有効であろう。本研究で得られた知見をより一般化可能な形で検証していくことで、乳児保育における安全配慮の実践をさらに発展させることができると考える。特に、今回の研究で明らかになった年齢による安全配慮の質的な変化を踏まえ、より体系的な安全教育プログラムの開発につなげていくことが期待される。

文献

- 葛野真恵・加藤智子.(2020).「ヒヤリハット」から見える保育についての考察.千葉敬愛短期大学紀要,(42),25-33.
- 厚生労働省.(2018).保育所保育指針解説.株式会社フレール館.
- 七木田方美.(2021).乳児保育における緩やかな担当制とヒヤリハット.和顔愛語,50,1-5.
- 大谷尚.(2008).4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案 —着しやすく小規模データにも適

用可能な理論化の手続き一. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要. 教育科学 54 (2), 27-44.

付記

本論文は令和 5 年度大阪総合保育大学大学院に提出した修士論文の一部を加筆、修正したものである。また、本論文の一部を日本保育学会第 77 回大会にて発表している。

表2 インタビューデータのカテゴリー

カテゴリー	理論記述	出処	番号
ヒヤリハット や事故の発生 要因	危険な環境が事故を引き起こす	B、E、F、G	a1
	遊びの中で起こる	D、E、G、H	a2
	こどもの予想外の行動で起こる	A、E、I	a3
	こどもの見守り不足で起こる	B、C、G	a4
	通常と異なる状況で事故は発生する	B、I	a5
	生活の流れの中で起こる	C	a6
事故予防と安全対策	ヒヤリハット報告を行い情報共有と要因分析を行う	B、C、D、E、F、G、H、I	b1
	環境の見直し・改善を行い、こどもの安全を確保する	B、C、D、E、F、G	b2
	他園の事例を自分事として捉え、自園での見直しを行う	C、D、E、F	b3
	事前にこどもの姿を具体的にイメージする	A、B、E	b4
	こどもの発達に沿っているのかを意識する	B、D、E	b5
	こどもへの見守りを意識して行う	C、D	b6
	マニュアルや季節ごとの活動は定期的に見直す	D、E	b7
	保育者が仲立ちとなる	D、G	b8
	事前に安全確認を行う	E、F	b9
	日常にひそんでいる危険を認識する	A	b10
	一定のルールのもと安全を確保する	B	b11
保育者連携	保育者間の情報共有と連携が重要である	B、D、E、F、G、H、I	c1
	事故防止策の検討は複数の保育者で行う	B、D、E、F、I	c2
	安全を確保するための保育者の動きと立ち位置が重要である	B、D、E、H	c3
	保育者間の相互理解が重要である	C、H	c4
	よりの確に伝えることでイメージを共有する	B	c5
	保育者の役割分担を行いこどもの見守りを行う	F	c6
家庭連携	園の保育に対する保護者の理解を得る	C、D、G	d1
	こどもの怪我を軽視しない	C、G	d2
	保護者の不安感を払拭する	C	d3
	日ごろからこどもの姿をこまめに伝える	C	d4
こどもの挑戦 と安全のバランス	こどものそばでの見守りや援助を行う	A、D、E、G	e1
	少人数で活動する	A、D、G、H	e2
	こどもの挑戦を促しながら安全対策をとる	C、H、I	e3
	こどもへの安全教育的な言葉掛けを行う	C、F、I	e4
	こどもは園の環境に適応しながら育つ	A	e5
	こどもの姿の把握を定期的に行う	C	e6
	こどもは小さな怪我から学ぶ	C	e7
	段差等を用いて身体作りを行う	H	e8
	こどもへ繰り返し伝える	H	e9
	こどもが探究できるように環境を変える	I	e10
保育者の意識 の変容	自身の子育て経験を通して目線が変わった	A、C	f1
	キャリアを重ねた気付きがある	C、E	f2
水遊び中の留意点	水遊び中は監視の徹底を行う	B、C、D、E、F、G、H、I	g1
	水深や水温に注意する	A、D、E、F、G、H	g2
	保育者の役割分担を明確にする	B、C、D、E、G、H	g3
	水遊び中は誤飲や窒息・転倒リスクの軽減を図った環境設定を行う	A、E、F、G	g4

	プールの配置は保育者が見えるところにする	A、B、E	g5
	こどもの体調が優れないときは参加を控える	B、E	g6
	事前に保育者で打ち合わせをする	D、E	g7
	衛生的な水質を保つ	F	g8
睡眠中の留意点	定期的な呼吸(睡眠)チェックを行う	A、B、C、D、E、F、G、H、I	h1
	うつ伏せや横向きは仰向けにする	A、B、D、E、F、G、H	h2
	寝具の状態を確認をする	A、B、C、E、F、H	h3
	布団の位置は見渡せるような配置にする	B、F、G、H	h4
	周囲の片付けを行う	B、C、E	h5
	室温を調整する	D、F	h6
	離れるときは他の保育者に声をかける	B	h7
食事中の留意点	食事中は必要に応じた援助や言葉かけを行う	A、B、C、E、F、G、H、I	i1
	食事は提供前に適切な大きさや形状か確認を行う	A、B、C、F、G、H	i2
	口に入ったまま席を立たないようにする	B、E、F	i3
	咀嚼ができていないか確認する	D、E、G	i4
	無理やり食べさせない	B、G	i5
	アレルギー児は一定の場所に座る	B、H	i6
	食事は少人数で丁寧にかかわる	C、D	i7
	一人一人の成長に合わせてすすめる	D、G	i8
	食事の前後に水分補給を促す	E、F	i9
戸外での留意点	こどもの所在確認(人数確認)を保育者が連携して行う	A、B、C、D、E、F、G、H	j1
	一人一人が好きな遊びを行えるようにそばについて見守る	C、D、E、F	j2
	慣れた場所へ行くことで安全性の確保を行っている	A、B	j3
	少人数で行動する	A、C	j4
	前後の安全確認と全体を見通すようにする	B、G	j5
	見守りと関わりのバランスをとる	C、H	j6
	散歩先の下見をする	G、H	j7
	遊具の年齢制限を確認する	G	j8
	交通安全に触れる	I	j9
保育室の環境設定の留意点	死角を作らず見通しの良い環境にする	B、E、F、H	k1
	リスクの軽減を図った環境にする	E、F、G、H	k2
	こどもが走らない環境作り	C、H、I	k3
	階段や窓の近くに高い台は置かない	A、F	k4
	安全な動線を確保する	B、I	k5
	月齢や発達に応じて玩具の入れ替えを行う	D、G	k6
	危険があった場合はその都度環境の改善を行う	B	k7
	広いスペースを確保する	D	k8
	災害時のことも想定し、災害時にも安全な環境にする	E	k9
指導計画に安全配慮を記載する意義	具体的な見守りの仕方や言葉掛け、援助を検討することができる	A、B、D、F、G、H、I	l1
	保育者間での共通認識や安全性の確保につながる	A、E、F、H	l2
	意識の維持と継続ができる	C、G、H、I	l3
	ねらいを明確にすることにつながる	D、E、G、I	l4
	具体的なこどもの姿をイメージすることができる	A、B、I	l5
	意識しているだけでは周りの保育者に伝わらない	E、F、H	l6
	こどもの姿の記録でもあるため、育ちの見通しを持つことができる	A、D	l7

	保護者対応も含めて記載することで家庭連携につながる	A、D	18
	記載することで事故が減少する	A、G	19
	事前に想定される危険を排除する	B	110
課題	保育者間の連携を強化すること	B、C、F、I	m1
	こどもの姿に合わせた保育の工夫を行うこと	A、E、F	m2
	重大事故にならない環境をつくること	A、D、G	m3
	相談や声をかけやすい環境作りを行うこと	B、E、I	m4
	こどもの行動を予測すること	D、G、I	m5
	話し合う時間を意識して設けること	E、F、I	m6
	保育者個人の危機管理意識を高めること	A、B	m7
	次世代への育成力の強化ができるマネジメントの必要性	A、B	m8
	こどもも大人も無理をしないこと	A、H	m9
	職員間の温度差を解消すること	B、E	m10
	園の保育に対する保護者の理解を得るために保育の意図や意義の発信を行う	C、I	m11
	こどもの主体性を尊重した保育をすること	A	m12
	危機管理に関する学びや他園の事例の共有を行う機会の確保	B	m13
	事例を活用し、事前の事故予防を行うこと	B	m14
	時代の変化への適応と積極的な取り組み	C	m15
	こどもが楽しんで安全な行動をとれるように促すこと	F	m16
	こどもの発達に合わせて環境を変えていくこと	H	m17
	絶えず振り返りを行うこと	I	m18